

〈いわき地方振興局長賞〉

消費税から分かったこと

いわき市立中央台北中学校

1年 佐藤 成彰

僕が税と聞いて真っ先に思い浮かべるのは消費税です。なぜなら、僕のなけなしの小遣いを少しずつ削っていく犯人であり、外税表示の頃はレジに向かう前に計算をして財布の中身と相談する手間をかけさせる厄介者でもあったからです。今は総税表示になったのでその手間はなくなりましたが、一ヶ月千円の小遣いでなんとかやりくりしている僕にとって、消費税はやはり憎き敵であることに変わりはありません。

そこで、僕はこの憎き敵について調べてみることにしました。まず、消費税は間接税である事、納付された税は国と地方で分け合うため、国税でも地方税でもある事が分かりました。どちらについても主な用途は社会保障費であり、具体的には年金、医療、介護、子ども・子育て支援などに使われるそうです。

ここで僕は年金と医療という二つの項目に目を引かれました。僕には九十七歳の曾祖父、九十一歳の曾祖母、六十五歳の祖父母がおり、皆年金を受給しています。幸にして皆元気なので、介護の必要はありませんが、祖母は腎臓が悪く、週三回の透析治療に通っています。この治療は高額で、一ヶ月に約四十万円程度かかるそうですが、公的助成制度のおかげで自己負担上限は一ヶ月一万円になります。と言うことは、この差額三十九万円は税金で支払われているということです。

もしこの制度がなければ、僕の祖母はいつまで治療を続けることが出来るだろうかと考えると、とても恐ろしくなりました。この制度に消費税が使われているかどうかは調べてみても分かりませんでした。ととにかく誰かがどこかで支払った税が祖母の命をつないでいてくれることは確かです。

祖母の医療費というたった一つの点で見ても、税の恩恵を受けて暮らしているのだということを実感することが出来ました。

増税についてニュースで取り上げているのを見ると反対したり、歓迎しない論調の報道が多く、マイナスのイメージを持ちやすいですが、ほんの少し調べてみただけでも税に支えられていることが分かります。

僕はこの作文を書くにあたって初めて税について調べ、税に対する考え方が変わりました。僕の小遣いを削っていく憎き敵も、どこかで誰かを助けている。そう思うと敵ではなく、僕がほんの少しだけでも誰かの役に立てるよう手伝ってくれる橋渡しのように思えました。これから何かを買う時、レシートに表示される数百円、数十円の消費税は、僕が誰かの役に立った証として誇らしく思うことが出来そうです。

将来社会人になって、消費税だけでなく所得税などの様々な税をしっかりと納めて皆の役に立てるよう、今出来ることを頑張っていこうと思います。